

# 平成 31 年度（第 2 期）事業報告書

平成 31 年 4 月 1 日 ～ 令和 2 年 3 月 31 日

一般社団法人パーソナルサービス支援機構

## 1, 事業の実施方針

法人として初めて、1 年間を通じた取り組みとなる。フリースクールにおいては、教育委員会や学校、スクールソーシャルワーカーの認知も少しずつ得られるようになり、利用の相談件数も徐々に増えてきている。また、体験活動やワークショップを地域の事業所の方に依頼することで、利用者が様々な体験を積むことができるだけでなく、多くの地域の方に不登校やひきこもりの課題について知っていただく機会となり、私たちの活動が地域共生へとつながることを目指し、活動を通じた周知活動を積極的におこなっていく。

今年度は本体事業に加え、助成事業や補助事業の申請をおこない、いくつかの助成や補助が決定した。その事業を有効に活用し、今年度単発で終わらず、次年度以降も継続して効果が期待できる取り組みにしていく。

### 〔本体事業〕

#### ① 「PS スクールかのや」

現在、鹿児島県大隅地域において不登校や苦登校の小・中学生は約 300 人おり、そのうち、教育委員会が設置する適応指導教室(鹿屋市・志布志市)には、実質 5~6%の生徒しか常時利用できていないのが現状である。一方で、フリースクールに通えている生徒もわずかしがなく、当スクールを継続して利用する生徒は前年度末で中学生 4 名にとどまっていた。小・中学生の継続的な利用を伸ばすためにも、各家庭の事情に寄り添った仕組みづくりを実践していく。

高校生の利用については通信制高校に在籍する生徒の学習支援がメインであるが、卒業後の進路を早くから想定した支援をおこなうため、生徒に合った就労体験や職業学習の受入れ企業・事業所の開拓をおこなっていく必要がある。

#### ② 「かのや自立就労サポートセンター」

ハローワーク内に掲示しているポスターをきっかけとした問い合わせが多いのだが、そのほとんどの方が発達障がいの範疇で離職を繰り返しているか、適応障がいなどで働くことに不安を抱えている方である。支援の先にある出口対策として、単に働き先を増やすということだけでなく、企業内で職業訓練を実施させてもらえる企業の開拓が必要である。

#### ③ 「おおすみ子どもアドボカシーセンター」

子どもの権利(意見表明権など)を守るために、子どもアドボカシーの活動の周知をおこなう。引き続き、児童養護施設や教育委員会、学校など、子どもと関わる施設や機関にその必要性を伝え、施設や学校内での相談場所の確保を目指す。

## 2, 事業の実施に関する事項

### 〔本体事業〕

#### ①「PS スクールかのや」

##### (内容)

小・中学生の不登校支援としてメンタルケアから学習支援までをおこない、様々な体験活動を通じて物事の興味や関心を促すことによって、自ら何かを考え、行動しようという自立心の芽生えを育んだ。また、高校生においては通信制高校カリキュラムのサポートと合わせ、体験型ワークショップや職業学習を通じた進学や就職のサポートをおこなった。

##### (成果)

- ・利用者数 小学生 6 名、中学生 13 名、高校生他 13 名 合計 32 名
- ・利用状況 中学校卒業生 4 名全員が志望高校に合格  
(私立特進 1 名、公立全日制 2 名、通信制 1 名)  
高校卒業生 5 名全員が進路決定  
(志望大学合格 1 名、専門学校 2 名、就職 2 名)

##### (課題)

相談件数は利用者数の倍近くになるが、利用料の問題や送迎の問題で利用に至っていない。利用料については市町等から委託金や補助金を受けているわけではないので、民間として運営する以上は公平に規定の利用料を徴収するしかない。送迎の問題で利用しにくい志布志市や曾於市、錦江町や南大隅町の児童でも利用いただけるような拠点を設置するか、送迎についてのサービスを拡充する必要がある。これらのことを踏まえ、各市町や教育委員会に向けた「学習支援」事業委託の営業を積極的におこなっていききたい。

#### ②「かのや自立就労サポートセンター」

##### (内容)

働きたい気持ちはあるもののその一歩が踏み出せないというひきこもり状態の方や、なかなか定職に就けないという就労困難者などの支援を、職場体験や準備プログラムの実施など段階的におこなった。また、就労や生活自立が困難と判断されるケースについては公的機関へのつなぎや、継続的な見守り支援をおこなった。

- ・職場体験・見学 参加者 9 名 (受入協力 16 事業所)

##### (成果)

- ・相談者数 35 名 うち正社員雇用 8 名、アルバイト 20 名、生活支援 2 名

##### (課題)

相談のきっかけは、ハローワークに設置するビラやポスターからが多いが、親からの子どものひきこもり相談も一定数ある。どこに相談しても「本人が相談に来てもらわない」と言われ、短くて 2 年、長くて 30 年も打つ手がなく放置されているケースがあった。就労支援は収益事業ではなく、市町等から事業受託しているわけではないので、アウトリーチを積極的におこなえない事情があるが、「交通手段があればどこかに相談してみたい」という若者もいて、実際にアルバイトにつながっているケースもあるので、「ひきこもりのアウトリーチによる就労支援」事業委託の営業を積極的におこなっていききたい。

### ③「おおすみ子どもアドボカシーセンター」

(内容)

フリースクールを利用する児童一人ひとりと向き合う時間をつくり、家庭や学校に対しての意見を聴き、家族への家庭内での対応指導、復学や今後の進路相談に生かしている。また、児童養護施設や各学校へ「子どもアドボカシー」の重要性、施設や学校内での相談場所やカフェなどのスペースの設置の提案をおこなってきた。

(成果)

児童養護施設からは情報提供によるお礼のメールをいただいたりはしているが、相談会等の実施には至っていない。学校については、令和2年度より鹿屋農業高校の通級指導の生徒に対して面談の機会をいただく方向となった。

(課題)

施設や各学校において「子どもアドボカシー」の認知がまだまだ低く、引き続き周知活動をおこなう必要がある。

## 〔補助金・助成金事業〕

### ①「鹿児島県」…県地域自殺対策総合相談事業（補助金 606,000 円）支出 806,375 円

(内容)

- ・対面相談事業 来所相談のべ 88 件、アウトリーチのべ 53 件
- ・電話相談事業 電話相談のべ 146 件、LINE 相談のべ 2,915 件
- ・人材養成事業 ゲートキーパー講座開催 5 回、参加のべ 86 人
- ・普及啓発事業 4 市 5 町巡回相談会開催 52 回、相談のべ 36 件  
当事者および家族交流相談会開催 4 回、参加のべ 37 人

(成果)

役場での巡回相談を開催することで信用度もあがり、来所が不可能な相談者宅へのアウトリーチが可能となったり、LINE 相談で普段はつながりにくい 10 代 20 代の相談者となつなうことができたりと、総合的におこなうことによる効果があったと思われる。

(課題)

巡回相談件数については、広報の仕方によって大きく差が出ており、自殺者が多いとされる中高年層の相談が肝付町以外ほぼ無かった。肝付町のみが町内放送を積極的におこなっており、それが理由と思われる。各市町にも積極的な広報活動を依頼する必要がある。

### ②「文化庁」…伝統文化親子教室事業（補助金 279,414 円）支出 283,944 円

(内容)

近年は、両親の共働きや一人親家庭などの理由で、親子で日本の伝統文化を学ぶ機会が少なく、また、核家族化によって昔の話を聞いたり体験する機会が少なく、鹿児島の伝統文化さえも知らないという子どもが増えている。伝統文化という人から人、人から地域と紡いでこられたものを学び、触れることで、自分たちのこれからの生き方を考える上で糧となることを目的とし開催した。

- ・薩摩焼教室 開催 5 回、参加のべ 96 人
- ・大島紬と和装教室 開催 1 回、参加 12 人

- ・日本料理教室 開催2回、参加のべ36人
- ・鹿児島茶教室 開催1回、参加12人
- ・生け花教室 開催1回、参加12人
- ・蕎麦教室 開催1回、参加20人

(成果)

今の時代、子どもを養育する親に心のゆとりがないために、子どもにも心のゆとりが持てなかったりする。中には、児童虐待というケースにつながることもあり、親子参加の中で話を聞いてる中で、やはり、その部分で、実際に手は出さないにしろ悩んでる親御さんが多く、そういった話が聞けたのが良かった。

(課題)

毎年度、継続した取り組みとして開催したいが、伝統文化関連は専門の講師に依頼しないとできないことばかりで、そのための依頼金(謝金)の支出が難しい。

しかし、内容は別として、親子参加型の取り組みを増やしていきたい。

### ③「福祉医療機構」…地域共生・共育・共働推進事業(助成金5,302,000円)支出5,772,284円

#### i) 送迎・出前サービス

(内容)

生活困窮家庭や一人親家庭の不登校児童を対象に、送迎および出前方式で学ぶ機会を提供。串良町にコミュニティハウスを設置し、居場所だけでなく地域との交流や寄り添い支援ボランティア講座なども開催。また、自立支援の一環として弓道体験も実施した。

(成果) 利用者実人数88人、年間のべ1,129人

送迎等サービスがあるからこそ支援につながったというケースについては、言い換えると、そのサービスがなければずっと孤立していたということになる。義務教育だけでなく、その後のひきこもり支援についても、大隅地域において送迎等のサービスの必要性が示されたと思われる。

(課題)

大隅地域の全域を送迎・訪問するには人員が不十分である。利用実人数のうち訪問のみにとどまっているのが66人で、心の準備段階ということもあるが、人員不足のために出前授業や新たな居場所拠点増設等の計画も立てられずに終わった。

また、これは助成金事業での話なので、助成が無くなった後も活動を継続していけるよう、行政や教育委員会との交渉をしていく必要がある。

#### ii) ワークショップ・体験活動

(内容) 開催回数20回、参加のべ215人

不登校や生活困窮家庭などの子どもたちは様々な体験機会が少なく、自立に向けて必要な物事への興味や関心を持つ心やチャレンジする心などが欠如しており、様々なワークショップや体験活動を通じて、自分が好きと思えることや自分らしい生き方を探すきっかけを掴むことを目的として実施した。

(成果)

不登校の子どもたちは家でテレビや動画を観たりして情報量はそれなりにあり、大抵のことは「知ってる」「見たことある」と答えるのだが、実際その作業を目の前にすると、二の足を踏んで手が進まなかったり、自信なさげに周囲の子どもものやってることを気にしたりしていた。しかし、

次第に、子どもたちが本来持っている好奇心や探究心が芽生えだすと、徐々に笑顔で楽しんでくれるようになった。復学という形にこだわらず、「学校に行けばもっとこういったことができる」と知ってもらうことから始めることが、不登校支援の基本の一つだと考えさせられる取り組みであった。

(課題)

やはりこの取り組みも、多くの子どもたちに参加してもらおうと思っても対応に限度がある。主催だけの取り組みではなく、教育機関や地域組織なども巻き込み、お互いが主催・共催となって、幅広く取り組んでいくことが必要である。

iii) シンポジウム開催

(内容) テーマ「地域共生・共育・共働の社会をめざすシンポジウム」

「生きづらさ」や「障がい」を抱えた子どもや若者たちが頼れるものは法や制度だけなのか。地域の中には何も存在しないのか。そして、その子どもや若者たち自身は、ただ何か待つしかできないのか。個人やその家族だけが背負うのではなく、地域や地元企業も共に分かち合える仕組みを一緒に考える機会となることを目的に開催した。

〔日時〕 令和元年 10 月 20 日(日) 午後 1:00～5:00

〔会場〕 鹿児島県鹿屋市 中央公民館 集会室 (住所：鹿児島県鹿屋市北田町 11103)

【活動報告】 大倉一真 一般社団法人パーソナルサービス支援機構

【基調講演①】 肥後祥治氏・鹿児島大学教育学部障害児教育学科 教授

「発達障害や生きづらさを抱えた子どもたちの 新たな生活支援システムの可能性」

【基調講演②】 冠地 情氏・イトコサガシ代表

「様々な支援があるにもかかわらず なぜ当事者の生きづらさは変わらない？」

【パネルディスカッション】

「大隅地域における地域共生・共育・共働の社会とは」

コーディネーター 肥後祥治氏

パネリスト 藤原奈美氏・大隅くらし・しごとサポートセンター センター長

井之上宏幸氏・鹿屋市街のにぎわいづくり協議会 会長 など

川島康文氏・大隅家守舎 代表 など

西岡 隆氏・厚生労働省年金局、大分県臼杵市市政アドバイザー

コメンテーター 冠地 情氏

(成果)

遠くからは、熊本や宮崎、指宿からもご関心をもって参加いただき、全体 110 名の参加者となるシンポジウムとなりました。参加された方のアンケートで、「制度のなかで対応できなければ、諦め半ば制度が変わるのを待つしかなかった。支援機構さんの活動に勇気もらった」「生きづらさを抱えている方の本質に、解っていたようで解っていないことに気づかされた。地域資源をどのように生かすか、連携の必要性、継続的な関わりのためのソーシャルワーク。ヒントをたくさんいただきました」「私たちの頭の中で、勝手に専門分野に分けて縦割りにしてました。公共、民間、専門性関係なく、ハイブリッドしていく仕組みでないと、今の社会や個人の複合的な課題には対応できないと再認識しました」「たとえ専門家でなかったとしても、自分たち、そして子どもたちのために、学びの場に参加し、自分に何ができるかを考える大切さをあらためて感じました」などといった感想をいただいた。

今後、この大隅の地域で、「我がごと・丸ごととして社会の課題に向き合うには、自分たちに何ができるのか」を考えるきっかけとして、その後の学校や企業から共同の話をいただけたことを考えると、このシンポジウムはその一石を投じられたと実感している。

#### iv) 臨時子育て支援の居場所&託児所開所(指宿市)

(内容)

4月末からの大型連休(10日間)に、「世間は休みでもパートなど非正規雇用の私たちは働かざるをえない。しかし、子どもを預かってくれる学童や保育園も休みなので困っている」という声を聞き、急遽、WAM事業の中で子どもの居場所と託児所を臨時で地域と連携して開いた。

(成果)

4月27日~5月6日(10日間)で0才児~小学校3年生までを対象に、のべ109人の参加があった。スタッフ以外に地域の保育士や看護師の方にも入っていただいたが、地元の高校生がボランティアとして実人数45人も協力していただけたことは、地域共生社会をめざす上で大変喜ばしいことであった。

(課題)

この取り組みは臨時的なもので、行政の協力を今後どのように得ていくかが課題であったが、コロナ騒動時には、行政への投げかけと同時に長期休暇の子どもの受入体制をとっていただけたので、意味ある活動になったと考えている。

#### ④「青少年教育振興機構」…夢・仕事つなぐプロジェクト(助成金308,000円)支出323,142円

(内容)

児童養護施設や通信制高校に通う生徒たちが、今の自分を見て、小さい頃に夢見ていた職業を諦めてしまうといったこともあり、職場見学や体験を通じて、もう一度その夢を追いかけたいと思ってもらえることを目的とし、地元企業等に協力していただき実施した。

(成果) 職場見学2社にのべ22人参加、職場体験13社にのべ21人参加

もともと子どもの頃に見ていた夢なので、参加した子どもたちは夢中になって職場での体験活動に取り組んでいた。「本当に叶うか分からないけど、今から諦めるのはもったいないと思った」と、これから生きていく原動力の一つになったと思われる。また、職場の方とのふれあいを通じて、働くことの大切さや、働く人たちに感謝の気持ちを持たれたことも評価できる。

(課題)

こういった子どもたちはもっと多いと思われるが、大隅地域は決して事業所数が多いとは言えず、その中で理解と協力を得ていかなければならないので、就職の出口対策も含めて、企業開拓は今後も継続的な課題である。

#### ⑤「キューピーみらいたまご財団」…食育プロジェクト(助成金940,000円)支出941,209円

(内容)

子どもたちの健全な成長のためには、様々なことを学び、将来に向けて自分らしい生き方を見つけることのできる環境づくりが大切ですが、「食」を育むことなくして、「こころ」を育むことはできない。体調管理は薬や栄養剤に頼るのではなく、野菜の効用などを知り、常日頃意識して体内に摂り入れることを考えていると、1日1日の活力が変わってくる。それを、農業学習や調

理実習を通じて学んだ。

(成果)

農業学習では、種を植え、苗を育て、苦労と一緒に自分自身を強く育てていくことで、今、自分の将来をあきらめるのではなく、自分を育てるのも自分なのだということに気づくことができた。また、料理人や職人の方に協力いただき、普段の実習では体験できないこともさせていただき、料理に対してとても興味を持ってもらえたと感じている。

(課題)

助成金によって実習に必要なものをそろえることもでき、今後も継続的に食育を続けていきたい。ただ、農家の方にいつまでもお世話になれないので、畑の管理などを自分たちだけでおこなうとなると、そこまで時間的な余裕がないので、作付けの量などを検討していく必要がある。

## ⑥「キリン福祉財団」…参加型コミュニティ（助成金 300,000 円）支出 385,409 円

(内容)

ひきこもり状態の方を対象に、まずは居場所参加から始め、他者との関わりの中で様々な体験活動やものづくりワークショップなどを実施した。

(成果) 参加者実数 24 人

- ・居場所コミュニティ 開所 152 日、のべ参加 761 人
- ・体験活動等 開催 14 回、のべ参加 228 人

自分も含めて人はみんなそれぞれの個性を持っていることを知り、自分だけが人と違うのではないと自分自身のことを受け入れ、自尊心の回復につながっていったことが、これからの再スタートになったと思われる。そして、ボランティア、就労体験などを通じて地域社会との「つながり」を持ち、一度は距離を取った社会に無理矢理押し戻すのではなく、安心して自ら踏み出せる一歩につながり、就職活動を始めた方、そして、就職に結びついた方が出たことは評価できる。

(課題)

この大隅地域には、ひきこもり状態の方が約 3,500 人。その数からすると今回の事業参加者は非常に少ないが、この問題については、大がかりなイベントなどで大人数を対象にしてどうにかできるものではなく、少人数単位で繊細に取り組まなければならない。その為にも、今後は送迎の充実や、複数地域での開催などを、行政などと連携して組みくむことを検討したい。

## ⑦「グリーンコープかごしま生協」…送迎・訪問支援（助成金 300,000 円）支出 300,000 円

(内容)

大隅地域における支援において、送迎やアウトリーチの仕組みの必要性を訴え、私たち法人だけが取り組む課題ではなく、マクロの視点で多くの方にこの課題を我が事として捉えていただくために、社用車の維持費として活用。

## ⑧「俱進会」…家庭教育自立支援（助成金 800,000 円）支出 800,000 円

(内容)

当施設内での食育活動を安全に継続できるように、流し台の入れ替えやキッチンパネルといった設備改修費として活用。